

明石の史跡（33）明石尚行の大力



將軍家の家督相続をめぐり、大乱必至となった応仁元年（1467）5月10日、嘉吉の乱以降、山名氏に奪われた播磨国を奪還すべく、赤松政秀は播磨で活動を開始する。

一方、13歳の当主—赤松政則は、5月26日から始まった両陣営の合戦において、昼夜4日にわたり、廬山寺の南、一条大宮の館で奮戦する細川勝久を救援すべく、300余人を率いて、正親町を下り、猪熊を上へ馳せ上り、斯波義廉方の甲斐・朝倉・瓜生という越前勢に切りこみ、廬山寺の西まで追いこんだ。

その時、西軍の新手として登場した山名教之勢にたいし、赤松方の浦上・小寺・依藤らの諸将が奮戦。なかでも依藤豊後守は、山名教之の一族、（定本名将言行録）山名常陸介と引き組んで首を得た。同じく、山名教之の郎等で、大力者として知られた片山備前守は、明石越前守尚行と戦い、首を奪われた。片山の傍輩である山名孫四郎も同じ運命となる。二つの首をとった尚行も、片山に劣らないほどの大力者であった（重編応仁記）。大力というのはすぐれて強い力。また、その力ある人。強力。怪力」（広辞苑）をさす。

播磨国の大力者といえば、元弘3年（1333）4月3日の洛中合戦において、赤松円心麾下の妻鹿孫三郎長宗が、六波羅勢に追撃され、西朱雀をさしてひきあげる途中、追走してきた20歳前後の若武者を、馬上から、鎧の総角（あげまき＝鎧の胴の背の二枚目の板に環を打ってつけた揚巻結の太い組み緒で、総を太く長くしたもの）を掴んで、宙に浮いたまま、3町ばかり走り、深田の中に投げ捨てた話が想起される（太平記1／日本古典文学大系34．266頁）。明石にもこれに匹敵するような「大力者」の系譜が存在したことは、楽しいものがある。